

言して毫も過言でない事を信するものである。され

ば記者をして

佛法東漸以來如斯不_レ有_二監德_一云々

と歎せしの彌陀の應化と尊稱し宗祖も地垂跡説を立てて、十徳を擧げらる。實に宗祖大師によりて高祖の生命は吾等淨土教徒幾千萬否有情一切の教主であ

藻 鹽 草

三 宅 勇 誠

藻鹽草、古るめかしい聯想から同じ語呂の慣習に誰人も兼好法師を浮べ易いは免がれぬ處なるが旨趣のあわれに心し給へ

微妙歡樂の鳥の囀が響いて居る

自分は今山腹を歩いて居る。何んと言ふ自然美、小鳥は頻に囀り繼けて枝から枝へと飛ぶ。なに心無く頭を揚げた。そして思ひ切り空氣を吸ふて見た。冷たい様なじんめりした春の恵を一杯に孕んだ甘そう

る。

今や一千二百五十遠忌を迎へんとする此の時に當り教徒たるもの高祖の眞意の何邊にあるかを熟と再思三省し高祖の行跡を心慕し善導的精神を以つて社會淨化運動に臨むこそ慈恩高大な萬一に酬ゆるべく又不忘の責務なりと信す。

な空氣は胸一面に浸み渡つて居た。と言ふ一刹那に俺は殆んど近頃にも稀な突發的な、空想の一切れが幻影の眼に茫然として漂ふて居るのだつた。初夏の冷風が今一度自分の頬を撫る。香の善い、ひらごの花の辱しさうに搖れるのを見て其の妖艶な色彩に恍惚とされて居た。自分の空想は益々妄想にとそれから其へとかざわかされて展轉した。美音は又も響き渡る。それは一羽の名も知らぬ小鳥だ頻に身體を動

かして居る。彼等は聲の有らん限り鳴いて居る。異性の爲めに本能主義を全うして居る。全く吾人の聽覺神經の快を起さしめんが爲めに、否肉を求めんが爲めに鳴いて居るのでは無い。彼の爲め自己を犠牲にして危を冒し我を忘れて鳴くのである。或る時は擒はれ、或る時は射たれ、或る時は聲を揃へて彼等詩人の前に萬古不朽の稱讚歎美があげせられた。謠はれた民謡、謠まれた詩文、膾炙された文學、そうした名作は皆此等の自然描寫から、無位無産の其の日の生活難を殆んど忘却された樂天的氣象の發露を明かに物語るものである。

……ふとした小鳥の囀から、次第に誘導された空想が、去年の初夏、海濱と平野と丘陵とを都合よく取り圍んだ麗大な別莊を訪れた事を思ひ出した。數人の下女、彼等は都會に田舎に充滿する虚榮に全く壓倒され、奴隸にされ、眞理の性情は全て腐醉されて、希望の樂土に憧れ乍ら徒方も無い虚偽の文化に泥酔しかけて居つた。美は尊ぶべき事も教へられ居た。生の貴重なる事も。併し彼女達、學ぶべき文化の教材には殆んど盲目であつた。彼等の顔に流

れ逆しる愛嬌の全ては虚偽の人生を如何無く代表させて居た。都會に程遠い田舎漁師村にも矢張り斯うしたキネマテイズムが押し返す潮の如く流れざわめいて居る、其等の干涉的な影響を受けた彼女達も當然半月形の眉墨を載せて居た。白粉の散布、顔面の赤らみと相和する純桃の色に誰をも融かさんとする醜き野心があつた。若者の胸に躍る血潮も恍惚たる青年の意氣も確に斯くした幻影の文化に對する材料であらう。又斯くした一面も聖を産み眞を出す最後の母であらう。美は醜であり醜は美であるからである。肉體の美は觀念の美の影であり。精神の美こそ、眞の觀念美を指す、純粹悟性の發露ならぬ。此の別莊に入つたのは丁度午前十時過ぎ、旅を掛けたものと云ふても長いものでも無く、僅か二時間餘りの乗車、遙れる郊外電車のけたましい車輪の音位で外に何も自分を痛める物も無く、窓を開け放つた海岸電車内は、清らかな海の鹽風が勢強く吹き込で来る。長い砂地の松原のざめく中を氣持よく走る。自分は其の時全く暑を忘れてしまつて居た。海上は浪が盛に躍つて居る、空は青天で、ぞす黒い様な潮

に白帆の漁船、淡い煙を靡せて居る遠洋汽船が小さく大きく散在して居る。漁師の村は今盛に得物の整理でもして居るらしい、赤銅肌の男、赤い腰巻一枚の女、眞裸な小供、薄桃色の、激しい太陽に輝のく令嬢のバラソルなど入り亂れる見物の群、この雑踏の目撃に瞬時も早く潮の味を口に入れたい強い渴望のシヨックが高まつて來て居つた。斯うした殆んど小供らしい氣分に、初めてでも海に親しむやうな胸さわぐ憧憬心を以つて今しがた下車し來つた處だつた。

案内された部屋、西窓を通してパノラマにも等しい絶影の部屋、眼下に松原が列び騒いで居る。何時に變らぬ藻盤草の香は、佳とは言へぬが強い海への憧れをより魅せしめ今でも忘れ得難い印象の著しいものたらしめた。暫くは眺望に餘念が無かつた自分は、女中の案内で食事の階段を下つて行つた。時に彼女の艶かしい香水の匂が漂ふ暑氣と強く刺戟するオールバックか、ワルツかセレナーデか、名も知らぬ搔き亂した様な頭髮、くすくすつた鳥の巢に網をかぶせた鬘、一種言はれぬ女の匂——鼻を突く不潔な

匂——腰を振る變な歩き振り等、色々と女性心理學者の様な氣分で視察し乍ら跡を續いて卓に付く。賑やかな家族の人々と、又其れと調和でもするかの様な華やかな放逐、まるで歡樂の巷に巢食ふカフェー文學を聯想して、此の珍客を喜ぶ小供達と食器を叩き出す。食後戻つた元の部屋は蒲團を掛けた籐椅子が置かれて居る、人絹で包まれたレースの洋蒲團、何處迄行つても、ブルジョアの名を匿さない部屋の飾は赤い眞紅の花瓣をふくらませて居る熱帶植物の一種はふさわしいローラーの轉に程よい調和と、美の均衡を保つて居た。友無き海濱無聊の生活にわびたる工子さんの入つて來た其の顔面に漂ふ性的な微笑は、更に強くアットラクトされた。しごろもごろの彼女の手付き、亂用せられて居るブルジョア語頬に流るゝ嬉喜の色、瞳に漂へる愛の表現、矢鱈に喋る彼女の心理からして、自分の心情に相互の融和と調合の雰圍氣が明らかに通つて居る様だつた、センチメンタルな彼女の其時の話題から自分は以前よりも稍々病的な感情家に爲つた様な氣がしてならぬ對話の沈黙から自分は時折り聞わて來る炎天の勞働

者の鼻歌が氣懸りに爲つて來た、此の部屋の全てが尙又彼女の生活がブル式なに對照して、暫く彼等ブルレッタリヤンの鼻歌に殆んど不可知な程に人生の驚きと怪奇に打たれた、自分は我知らず線路工夫の勞働に注意せざるを得なかつた。彼等悲惨な程の逆境に貴い經驗の一縷をたどり出した。流るゝ彼等の汗が語る無産文化の貴重な建設に思索を廻らした。プロの全生活の裏面に得難い人生の歴史に轉た感涙の念に耐わなかつたからであつた。受けたショックと聞き慣らされた俗謡が今しも眼前に浮び響いて居る恰かも聖士の靈感に打たれたる如く……當時の空想を憶い抱いた無益の同情に今更ら深い印象に繋がれて居る。

聲又美音と囀を盡して小鳥は飛び去つた。

後は靜かな山腹、奥に響く反響は、田園に喘ぐ農夫の群が——一尺許り延びた麥畑に入交した菜種の花、間を縫ふ薺花草の畦に雲雀の美音に惚りとして、綾なす田園に働く人々——見下した春の畑に歌ふ閑な民謡であつた。此の聞き慣れた俗謡に自分は今も去年のブル生活の虚夢を呼び戻して居た。

それは案外にも、炎天の勞働者の鄙俗な民謡に今又長閑な農夫の俗謡に激しい情緒の共鳴があつたからである。

財布の無い、地面の持たぬ、消極者の無い自分には斯した天心爛漫な自然の恵みに接する時、同階級に立ち働く無産勞農大衆達に出くわす毎に深いパツシヨンに印象付けられるのを感じず。僕の最後と其の行き詰りの極地とは此のプロ文化に接する何物かに裁かれる事を豫期すべき事を知つた。

以上の知識からして色々の想像が涌く、併し最も激しい疑惑に動かされるのは、果た無産者の文化とは何物ぞ、と言はる可きものである。何人も此の問題に對しては、た易く解答を與ふ事は六ヶ敷しい事であらう。勿論此の問題はブルに立脚する見識の勝れたる可き幾何なる學者も哲人も満足せしむ可き錠を持たぬであらう。若し持つ者と主張する人ありとせば、それは必ず矛盾を指すに違ひ無い。自分はこのプロ階級に立ち、此の見界を通して、無産文化の或る雜誌の趨勢論を引き並べやう。

無産者は宗教を信じ藝術を樂しみ道徳を守り思辯

に耽ける餘裕が無い。彼等は日々の糧にのみ努力を拂はねばならぬ。どうしてさう言ふ空想に囚へられ安閑として其の日が送られやうか。「藝術の代りにパンを與へよ、道德の、宗教の代りに肉を與へよ」と。

是は明かに無産者の要求である、彼等は是等の文化を要求する丈の餘祐も無い。文化は餘祐あるものゝ特權である。今假りに考へて見るがよい。マネーやラファエルのあの冴いた腕、春舉や栖鳳のあの神秘的な程に妙筆の傳へる色と形、莊大華麗な大ビルディングの如き、萬古の思索を壓倒して、微に入り細に渡るカント、ヘーゲルやスピノザ等の大思辨を果た亦數十年の星霜を費した、ワグネルやゲーテ、シルレルの作品を、何等の素養無しで、普通の頭腦で僅か二三時間の休息時を利用して、吟味批評する事は可能であらうか。従つて餘祐の無い者には文化は無いのが當然ではないか。彼等の現在生活は資本文化に引き擦られて進んで居る。吾人は此の痛ましい状態を目撃したゞけでも、現在文化の誤謬を容易に自覺し、何んとあつても新らしい文化を築かねば

ならぬと奮然として大地を踏みしめるであらう。それこそ救はる可き無産文化である。人間精神の不可知に到達して居純る粹な力を持つ無産文化はブルの立場から理解されやう筈が無い。併し無産者は現在無産者としての一つの道德があるからこそ彼等の組織に従つて働いて居るのでは無いか、従つてパンの爲とは言へ制度の上に勞働するのは彼等が彼等自身の道德を持つからである。暇がある者のみに道德などがあるで無く勞働其の事が顯著な道德の結晶である。現在資本社會に信せらるゝ道德は古典的な屈從の道德であつて人格其のものゝ道德では無からう此の點に於て新しき無産者の文化は其の新道德の樹立することにある。取りも直さず現今暗にもかく無産者のうめきは此の新道德の實現に覺醒せざる一大缺陷ならん哉。宗教と藝術が人間の遊戲であり贅澤である限り暇のない無産者には無用の長物である、併し乍ら其等が人間そのものゝ眞髓であり生き行くに缺くべからざる重要なものであるならば無産者も亦生きる限り其等を持つ筈である。彼等も亦草の葉に光る露の珠を見て自然の麗はしさに驚き技巧の

無い無聲の詩を心の底に誦する事も出来る。夏は水の冷たさを喜び冬は枯野の石に親しむ自由を見出して居る。其處には畫筆も無く大理石も無い、寧ろ其等に必要なる時間も財も無い。彼等の神は迷信を離れて靈魂そのもの、眞を導く事が出来ない。換言せば無産労働者には宗教とか藝術とか、無いのでは無く正しく導くことが出来ないと言へやう。只單に民衆や大衆の文字を冠したそれと考へるならば甚しい誤謬である、無産者の文化は贅澤でも無く虚榮でも無く至純な靈魂から神に捧げられたるこの一燈に過ぎぬ。此の自覺を通してのみ實現する貧者の一燈はたとへその光に於て細くともそれは純潔なる無限の力を以て如何なる暴風にも消せない。私はこの一燈こそ全人類を無限の淨に地導き行くものである事を信ずる、嗚呼貴きこの一燈哉、點せらる可き世界に光は暗よりの理想に引き行く可き人はそも誰哉。

富まれざる人を、且つ心底に稚々として新燈に青燭をゆるがし給へる君達よ、吉水の法燈に身を焦しつつある法の友人よ。四海の人は全て富まず。色に富まざるものは心に富まし給へ。色に富む人達は肉

慾と官能の惑溺の爲めに痺れたる靈魂を蘇らしめ給へ、されば君を待ちて貧しき者は愈々幸福なり。「神聖なる哉、至純の労働や、誠ある鋏を手にせる人々に幸あり給へ、自れから延びんとする晩春の樹葉に相通ふ神秘の力に引かれ喜んで歸依せんとする努力を我等はそれを眞の宗教と名付けたい。」と何處かで聞いた聖訓を憶ひ浮かべて靜かに眼を塞ぢた。其處には殆んど失神されたるが如き長き空想は全く幻滅に歸して居つた。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。